

## パネラー報告 4 —牧口常三郎の生涯から7. 6を考える—

塩 原 将 行

昨年7月6日、私も初めて、昭和18年7月6日に伊豆下田市内の牧口常三郎が逮捕された場所を訪れました。最初の印象は、「遠い」ということです。そして、何故、このような地で官憲が牧口を逮捕したのかという素朴な疑問が生まれました。そして、その次に考えたことは、既にその年の5月、神札不敬問題で中野警察署に1週間留置されており、牧口は当然予想していたことであつたはずだということです。伊豆に同行した和泉ミヨの日記にも、牧口が逮捕されても格段に動揺した様子は見えず、「またか」位の受けとめ方のようにも見えます。牧口自身も「戸田君に宜しく」という言葉を残していることから自分のみの逮捕と考えていたようにも思えます。

### 1. 牧口の国家諫暁観

今年6月、もう一度、下田を訪れる機会がありました。その時考えたのは、牧口にとっての国家諫暁とは、何であつたのかということです。国家諫暁は、宗門の歴史からいえば、一宗の長が国家の長に対して行うということになります。しかし、昭和18年6月27日に、神札を創価教育学会も受けてはどうかというような一宗の長では、それを望むことは出来ないことでした。昭和16年12月8日の真珠湾攻撃によって太平洋戦争がはじまり、ますます、軍国主義による統制が強まる中、国家の方針に反する考えを述べるということは、無事には済まないと考えなければなりません。

牧口自身は、昭和18年以前、すでに、15年夏には、国家諫暁ということを考えていたと思われます。この夏、夏季修養会に参加した山田貞子さんが証言しています。

牧口の行動を年譜で追うと、昭和14年以降に大きな変化があります。それまでの、講演会の活動から、大善生活実験証明座談会と呼ばれる、一対一の対話による宗教啓蒙活動に力を入れていきます。そして、その合間を縫うように、ひとりの会員、多くは青年ですが、その家族との対話の為、ある時は遠く地方都市に出かけ、また、自身の縁故も訪ね対話を重ねています。短期間牧口家にお手伝いに来た方の千葉の実家<sup>(1)</sup>から帰った牧口が「今日はキチガイ爺といわれたよ」と家人に笑って語ったという話が残っていますが、当時の時流と真っ向から反する彼の主張が知人であっても受け入れられることは、極めて困難であつたと思えます。

昭和14年に牧口家に嫁した三男洋三の妻貞子さんによれば、70歳前後の牧口が、休む間もなく出かけ、自宅にいる時も全て訪問してきた会員達との対話にあてていたといいます。牧口が、伊豆に旅立つ前日、7月1日もまた、東京商科大学（現在の一橋大学）に学ぶ3人の学生と懇談、会員に連れられてきた山崎覚は、牧口が語った価値論の図解を日記に残しています。

当時の創価教育学会は、牧口の行くところで座談会が行われ、そこが最前線でした。「最前

線」といったのは、昭和16年11月に行われた第1回九州総会が、特高刑事の監視の中行われたことや、その他の会合にも特高の監視、内偵があったことを考えると、日々の牧口の活動こそが、実は国家諫暁の具体的な方途ではなかったかと思うからです。特高をも恐れなくて、大衆の中に広がっていく運動こそ、牧口が考えていた国家諫暁そのものだったのではないのでしょうか。

昭和16年に創価教育学会に入会した青年、渋谷邦彦氏は、牧口は、逮捕の直前まで夕方身近な青年たちに、日蓮の国家諫暁の書である立正安国論と価値論の講義をしていたといっています。

このような民衆覚醒運動こそが国家諫暁そのものであるという発想はいかにして生れたのか。それは、第1に、牧口自身が帝国主義の時代に生きていたということと無縁ではないでしょうし、第2に、牧口が常に一人一人を大切にしている教育活動に生きてきたことと無縁ではないように思います。

## 2. 牧口が生きた帝国主義の時代

牧口が生きた時代は、どんな時代だったのでしょうか。牧口は、明治4年に新潟県の荒浜で生まれ、昭和19年11月18日、巣鴨の病監において73歳で獄死します。牧口の生きた時代は、帝国主義が次第に世界を覆っていく時代であり、日本もまた、欧米の帝国主義の脅威の中で、それを撥ね退ける為に急速な近代化（富国強兵と殖産興業）を行い、そして、日清、日露の戦争以降は、今度は日本が、帝国主義国家の一つとなってアジアの国々に進出していきました。大日本帝国の終焉は牧口の獄死から9ヶ月後のことでした。

その時代の日本はどうであったか。富国強兵と殖産興業、すなわち国家のために、多くの人々が土台となり犠牲になった時代です。女工哀史で知られるように若い女性たちが過労と悪条件のため病気に倒れ、炭鉱などの悪条件下の労働、戦争で死ぬことが当然とされ、美德とされた時代、帝国主義の時代は、実は、他国の民とともに自国の民もまた、国家のために犠牲になった時代と言って良いと思います。国家と一人の人間の価値を比較したとき、「人間の為の国家」ではなく、「国家の為の人間」となっていた時代といえると思います。牧口の「児童の幸福の為の教育」との言葉、言いかえれば将来にわたる一人一人の幸福のための教育とは、当時の時流とまったく逆の発想の万金の価値をもった言葉なのです。

## 3. 人生地理学における人道的競争—建部の帝国主義の競争観との比較

そのような、拒むことの出来ない世界的な「帝国主義」の流れに対して、牧口は、どのように考えていたのでしょうか。1903（明治36）年に発表された『人生地理学』において、「国家間の競争」について牧口がどのように考えていたか、特に、「人道的競争」の意味するものを考えると浮かび上がるように思います。

その章の参考要書のひとつ、社会学者建部逯吾の論文「国際競争と帝国主義」<sup>(2)</sup>と比較すると良いと思います。建部は、現在行われている、国際競争として、戦闘及び経済の2つをあげ、更に、文明的競争をあげました。建部のいう文明的競争は、人道的競争と一見似ているようですが、全く異なります。建部は、文明的競争として宗教、国語、風俗、慣習をその主要な事項とするといっています。競争という以上、それに敗れた国の宗教、国語、風俗、慣習が勝った国のものになってしまうということです。

そして、当時の帝国主義の遂行はこの三様によるとして、戦闘的帝国主義、経済的帝国主義、

文明的帝国主義をあげています。

建部の国家間の競争形態と牧口のそれを比較してみると、牧口は、国際間の競争の「移行」形式として、軍事的競争から政治的競争、政治的競争から経済的競争、経済的競争から人道的競争への移行を論じています。当時実際に見られる軍事的競争、政治的競争、経済的競争、それらは、競争の勝者が、強い国が弱い国をどのような形であれ支配すること、建部の言う帝国主義を意味しています。それに対して、牧口の考える「人道的競争」は、強い国が弱い国を助けてあげるという強い国による弱い国の支配という帝国主義の枠を突き抜けた発想です。本当に尊敬される国、人道競争の勝者とは、「威服の代りに心服させるにあり」と述べています。

また、「人道的競争形式は之を今日の国家間に於て見る能はざれど<sup>(3)</sup>」と述べ、「生存競争の最終の勝利者が道徳にありとの認識は或る少数の人士間にのみ限らるゝが如し<sup>(4)</sup>」として、当時このような考えを持つものがわずかであったといっています。

この頃、人道という用語がどのように使われているか新聞記事を見ると、「人道問題」という言葉が、戦争における虐殺、婦女の過度の労働等に使われています。また、「人道主義」という言葉もトルストイをはじめ使われるようになってきています。その中にあって、また、国家の行動原理として人道的競争を挙げているのは、帝国主義の時代の先を32歳の牧口は見えていたのではないのでしょうか。また、人道的競争について述べた人生地理学のその章節に帝国主義という言葉を使っていないことにも注目したいと思います。

#### 4. 人道的競争の発想を何処から得たか

それでは、「生存競争の最終の勝利者が道徳にあり」との認識を持った少数の人とは誰でしょうか。私は、その手がかりとして、アメリカ・ウイスコンシン大学のポール・S・ラインシュ教授を挙げたいと思います<sup>(5)</sup>。実は彼の著書は、高田早苗が抄訳した『帝国主義論』として人生地理学の参考要書にも入っています。帝国主義に就いて縷々論じた上の最後の一節を紹介します。

「今日の如き国際的競争激烈なる時に<sup>勢</sup>方りて永久平和の黄金時代を夢想するは<sup>迂愚</sup>の<sup>愚</sup>識<sup>を</sup>を免る可らずと雖も然れども世界の強国にして共同利益の存在を認め文明の進歩、世界の開発と云ふか如き大事業に就ては各国其の利害の衝突を患ふるの要なきを知らば茲に<sup>狭隘</sup>なる民族的觀念漸次其の跡を潜め吾人か相共に人道の勝利を歓喜するの時の必らず遠からずして来る可きなり<sup>(6)</sup>。」

『人生地理学』は、このような考え方を受けた上で、より具体的に、帝国主義の次の時代、人道主義の時代の、国家の行動規範を示しているように思われます。

小出先生が述べられたように、『人生地理学』には、国家の役割が明快に4点にまとめられています<sup>(7)</sup>。その中で、第3に個人の自由を確保する活動、4番目に国民生活に対しその幸福増進の活動をあげておられます。また、創価教育学体系には、「国民あつての国家であり、個人あつての社会である<sup>(8)</sup>」と述べられています。

国家諫曉を、単純に国主諫曉と捉えなかったと思われる牧口の視点を考える上で、個人の人格の尊厳と一人一人の人間としての権利に牧口が若い頃から着目していることは重要ではないでしょうか。

## 5. 庶民の為の教育を実践

次に、牧口は、著書にその考えを述べるに留まらず、帝国主義の時代にあつて、自らの出来る実践の中で、人間一人一人の存在を大切にする行動を主体的に起こしています。

まず挙げたいのは、『人生地理学』出版後の女子教育の活動です<sup>(9)</sup>。女性の自立と、自立による幸福獲得を可能とする教育に情熱を燃やしました。公的事業でないにも関わらず、経済的に恵まれない子弟に対する授業料減免の制度を持ったものでした。しかし、日露戦争後の大不況下、この事業は3年あまりで挫折、人手にわたる事になります。普通、学校というと小さな塾からはじめるかもしれませんが、しかし、牧口が始めたのは、全国どこでも誰でも学べる通信教育の学校です。廉価であり、自宅で学ぶことができ、多くの少女達の学習を可能にしました。目の前にいない子ども達をも対象にして考えることができること、ここに牧口のすごさを見る思いがいたします。

その後の牧口は、文部省での地理教科書の編集の仕事を経て、校長として、小学校経営にあたりますが、残されたエピソードから牧口の視点が見えてきます。①貧しい子ども達が多く学ぶ三笠小学校で行われた、シカゴのペニーランチをモデルにした給食<sup>(10)</sup>、②銭湯の子ども料金の値下げ陳情の先頭に立ったこと<sup>(11)</sup>、③関東大震災後、小学校では最も大規模なボランティア活動であった小善会<sup>(12)</sup>、④震災で家が焼かれた子ども達に対する白金御料地の林間学校の運営<sup>(13)</sup>等、国家のために子ども達を育てるというのではなく、子ども達の幸福のために、社会は何ができるかという発想があったと見る事ができると思います。

## 6. 日蓮仏法への帰依とその後の牧口の実践

白金小学校長時代に牧口は、日蓮仏法への帰依を決意するのですが、柳田国男のこのような家庭に不幸が続いたことが原因<sup>(14)</sup>というよりは、私には、全ての人々を幸福とすることが、教育だけで可能かというジレンマがあったのではないかと推測しています。牧口家、妻クマの実家も日蓮宗であり、縁がない訳ではなかった日蓮仏法ですが、何故、昭和3年頃に本格的に取り組もうとしたのか。三谷素谷が僧侶ではなく、社会活動の経歴<sup>(15)</sup>もあり、同じく子どもを亡くし、何より、彼の説く『立正安国論』に惹かれるものがあったのでしょうか。全ての人間の幸福、社会の繁栄には何が必要か。それは、牧口自身が追い求めてきたテーマであったのではないかと考えています。

牧口の日蓮仏法帰依後は、行動において変化が現れます。当初予定していた創価教育学体系12巻の刊行は、5巻も準備されていたが<sup>(16)</sup>、出版による活動に限界を感じ、体系は4巻までに留め、講演会活動に比重を移します。北海道、新潟だけでなく、東京でも活発に行われていたことが「教育週報」<sup>(17)</sup>等で知ることできます。しかし、このような方式にも限界を感じ、座談会による一対一の対話覚醒運動に移行し、創価教育学会の興隆期を作ります。運動の変化は、また、活動の内容と構成員の変化でもありました。内容面では、教育学、郷土教育から、価値論と宗教的色彩を強めます。対象も教員中心から、戸田周辺の出版グループだけでなく、既に戦前の段階で、青年婦人も含めた大衆運動の色彩を持ち始めました。その活発な活動が当局の忌諱するところとなったといえます。今まで研究してきた九州八女の福島支部や、三多摩保谷を中心とした北多摩支部にそれを見ることができました。

このように、一対一の対話運動を国家諫暁の具体的方途と捉えることができたのは、牧口が一人一人の人間の可能性に信を置いていたからに外なりません。これは、仏法に対する確信の深まりとともにより確固としたものになりました。

## 7. 牧口の人道的実践と創価大学の校風

最後に、大学史という視点から創価大学を考えてみます。明治に設立された国立大学は国家の為の人材育成の機関として創立されました。それに対し、多くの私立大学は、それぞれの建学の精神を掲げて誕生しました。牧口常三郎の思想と実践から考えた時、牧口が後世に託した創価の大学は、人のために尽せる人を輩出する大学、民衆のための大学ではないかと思います。そう考えると、いまの創価大学の学生たちにその精神が漲っている事は大変うれしい事です。牧口が生涯を賭して実践した人道の思想、その本格的展開は、創価大学に託されていると思います。

### (注)

- (1) 稲葉家のお手伝いさんの石橋さんの実家
- (2) 人生地理学の参考要書には「▲建部文学博士「生存競争」(日本人)」とあるが、雑誌「日本人」に掲載された建部の論文を検討すると、「国際競争と帝国主義」(『日本人』第178号、明治36年1月、14-18頁)と考えられる。
- (3) 『牧口常三郎全集 第二巻』(第三文明社、平成8年)398頁。
- (4) 同上 394頁
- (5) 『人生地理学』参考要書には、「▲高田法学博士『帝国主義論』」とあるが、それは、ラインシュの抄訳である。
- (6) 高田早苗抄訳『帝国主義論』(東京専門学校出版部、明治34年)208-209頁。
- (7) 前掲『牧口常三郎全集 第二巻』337-342頁
- (8) 『牧口常三郎全集 第五巻』(第三文明社、平成9年)114頁。
- (9) 牧口の女子教育については、何度か発表の機会を得たが、平成15年8月8日の通信教育学会講演会において「創価大学通信教育部の源流—2万人が学んだ牧口先生の通信教育」に詳しくふれさせていた。
- (10) 読売新聞大正10年12月8日付4面に「小学校の貧しい児童に無料で昼食給与 本所三笠小学校の試み 夜学児童にも給与の計画=パンと汁と二杯」の記事がある。以下、本文。

本所三笠小学校では最近同校生徒中の気の毒な境遇にあるもの約百名ばかりを選んで昼食を給与することに決定し経費と設備の都合上当分三十五匁の麵麴(パン)一個と豆腐や野菜を材料にした汁二杯とを無料で給与し成績の如何によつて工場から自宅に帰らないで直ぐ学校へ来る夜学の生徒にもそれを実行して見やうかと目下研究中で市の学校衛生課<sup>(\*)</sup>技師吉田章信学士は生徒に給与する食料に就いて綿密に調査中である。夫れについて牧口三笠校長は語る。「特殊小学校生徒には貧乏で昼食を抜いてゐるのがある。顔の色が蒼白で如何にも纖弱らしく見えるので取調べると執れも絶食の結果で而かもたまたま昼食を食べても碌な物を食はぬから全く栄養不良に陥つてゐるのさへある。処が幸い同情して呉れる人があつたので御飯を食べさせやうかと思つたが夫では食堂の設備万端に多額の費用を要するので当分特別注文の一個四錢づゝの麵麴といろんなものを切りこんだ味噌汁を一回に二杯づゝ給与しているが成績は大変よい夫れで工場から自宅に帰らないで直ぐ学校へ来る夜学生中の特殊なものにも給与しようかとも思つているが満腹する程与へてないのに『お前は学校で食べて来たらう』と云つて家で食を与へぬやうなことが起りはせぬかと夫れを心配してゐる。元来此方法は米国市俄古(シカゴ)の場末の貧民学校で盛にやつてゐるベニーランチに倣つたものである』

\*読売新聞には、市とあるが、文部省学校衛生課の誤り。吉田は、体育運動掛長。

- (11) 大正11年度白金小学校校長日誌および、読売新聞大正11年9月6日付5面、東京日日新聞同年9月6日付9面、朝日新聞(夕刊)同年9月6日付2面、時事新報同年9月6日付6面、中央新聞同年9月6日付2面、国民新聞9月6日付2面、報知新聞(夕刊)同年9月6日付6面による。

- (12) 『大正12年度白金小学校学校日誌』および「管下学校教職員団体ニシテ過搬ノ大震災ニ際シ救護事務ニ関シ功績顯著ナルモノノ調査ニ関スル件」(大正13年2月19日)。「シロガネ第6号」(白金尋常小学校児童保護者会、大正13年)口絵写真および山崎妙子「小善会」18—19頁。
- (13) 『都市教育237号』(東京市教育会、大正13年9月)20—23頁および東京朝日新聞(夕刊)大正13年8月22日1面。大正12年度、大正13年度白金尋常小学校学校日誌。
- (14) 柳田国男「牧口君入信の動機」(『定本柳田國男全集 別巻3』、筑摩書房、昭和46年)460頁、466頁。
- (15) 昭和3年11月30日付の三谷の履歴書には、大正5年から昭和2年まで12年間東京において貧困家庭の青年子弟を自宅に収容し、指導訓育。その間各種社会事業に従事とある。
- (16) 『牧口常三郎全集 第七巻』(第三文明社、昭和57年)409頁。
- (17) 「教育週報」には第519号(昭和10年4月27日付)から第538号(昭和10年9月7日付)まで創価教育学会の講演会等が報じられている。

(以上のパネル・ディスカッションの各稿は、当日の原稿を加筆・訂正したものです。)